

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第993号 平成27年9月4日

二宮尊徳

農政家であり思想家でもあった二宮尊徳は、天明7年（1787年）の7月23日、相模国足柄上郡栢山村（現在の小田原市栢山）に生を受けました。もっとも、7月23日というのは旧暦であり、現代の暦に置き直すと9月4日となります。

二宮尊徳については、内村鑑三著「代表的日本人」、二宮英彰・中村竜夫共著「現代に生きる二宮尊徳」、勝部真長著「改革者たち」、石川佐智子著「世界に誇る日本の道徳力」等多数の文献が出版されていますので、それらを基に、ごく簡単に、その人となりを紹介しておきたいと思います。

二宮尊徳（幼名金次郎）が生きた幕末という時代は、多くの藩が財政破綻に瀕していました。そんな中、尊徳は、生涯をかけ620か町村の財政再建を成功させ、藩の財政立て直しに貢献しました。

尊徳は、4歳の時に暴風雨により酒匂川が決壊、父親の田畑の大半が土砂に流されます。更に不幸は続き、尊徳が14歳の時父親が死去、その2年後には母親もこの世を去り、叔父の家に身を寄せます。

その後尊徳は、伯父の家で農業に励むかわら、荒地を復興させる等してお金を稼ぎ、20歳にして生家を再興させます。

叔父は、百姓には学問はいらぬという考えの持ち主であったため、尊徳は、農家の仕事に精を出しながら、早朝山へ薪を取りに行く時も道々本を読みながら行くというように、寸暇を惜しんで勉強したといわれています。その姿は彫像として残されており、かつては多くの小学校の校庭で見られたものです。

生家の再興を果たした尊徳は、その実績を買われ、小田原藩家老服部家の財政立て直しや、廃村同様の状況にあった藩主大久保忠公の分家の知行地「野州桜町領（栃木県真岡市）」の再興を任せられ、旧勢力の抵抗に遭いながらも、いずれも大きな成果を収めます。

尊徳は、桜町領の再興を引き受けるに当たり、「一家を廃し、万家を興す」という思想の下、資産の全てを処分し、家族共々故郷の家を棄てて桜町領に移住したと



というのは、有名な話です。

尊徳が身を以て示した行動哲学には、今日においても学ぶべき点が多くあると思います。その中の幾つかを紹介したいと思います。

私が最も注目しているのは、「積小為大」という考え方です。

これは、「小さな努力の積み重ねが、やがて大きな収穫や発展に結び付く。小を疎かにして、大事を為す事は出来ない（石川佐智子著「世界に誇る日本の道徳力」から）」というものです。

私達は、とにかく楽をして儲けよう、労を惜しんで直ぐに結果を求めようとするが、日々の小さな努力の積み重ねなくして、良い結果が得られるはずはないという事です。

また、「勤労」と「推譲」という言葉も重要です。

「勤労」については、単に勤務時間の中で与えられた仕事をこなすというような事ではありません。尊徳が示しているのは「人は自分に備わっている徳を最大限に発揮して働く事により、生きる糧を得て生きる事が出来る。また、そうして働く事により生きる知恵を磨き、自己を向上させる事が出来る（上述書から）」というものであり、勤労というものの奥深さを感じさせます。

「推譲」というのは、「分度（自分の置かれた立場や状況を踏まえ、それに見合った生活をする事）を守る事によって余財を生み出し、それを家族や子孫のために貯えたり（自譲）、広く社会のためや未来のために譲る（他譲）。そうしてこそ幸福な社会が実現出来る（上述著から）」というものです。今日、ITバブル等で大儲けした人の話は良く耳にしますが、その儲けを自譲する人はいても、他譲する人は一体どの位いるのでしょうか。

尊徳は、戦前、刻苦勉勵の象徴として国定教科書でも取り上げられ、薪を背負い、歩きながら読書する少年金次郎の彫像は、全国の小学校の校庭に建てられました。

置かれている環境の厳しさに文句も不平もいわず、黙々と働き、地域の発展に一身を捧げる、そんな尊徳像は、時の為政者にとっては都合の良い存在だったといえますが、しかし、「支配階級には願ってもない理想像を作るために、金次郎の生涯から虚像造形に都合の悪いところは除去して、その思想スケールの大きさは消された（和巻耿介著「草の巨人」から）」事も否定はできません。

確かに、尊徳は、土農工商という封建制度の枠組みそのものを壊そうとは全く考えていなかったようです。しかし、「上層に対して非があれば齒に衣着せず直言もしているし、仕法（改革の方針）の実施に当たっても、まず支配者側に厳しい分度を求めてもいます。そういう意味からすれば、尊徳は革命家ではなく現実政治家であった（上述書から）」といえましょう。

戦後は、戦前の教育の反動から、尊徳の事績が顧みられる事も少なくなり、「本

を読みながら歩いては危険ではないか」等と批判する人まで現われています。

尊徳の事をネットで調べていたところ、薪を背負いながら読書するというのは「児童労働」「児童虐待」の問題であり、本来、子ども達には信頼出来る大人を探してSOSを出すことを教えなければならないのに、それを美徳であるかのように喧伝するのは、忍従を教えるようなもので問題だという趣旨の主張が目にとまりました。

少年金次郎が生きた時代は江戸時代の末で、当時は子どもも立派な働き手でしたから、多くの子ども達は、金次郎程ではなかったとしても、大人に交じって働いていたと思います。

尊徳の事績を辿って学ぶべきは、勤勉努力する事の尊さという事であり、それを、現代の眼で見て「児童にそこまで働かせるのは問題だ」と批判するのは、必ずしも適切とは思えません。

特に、尊徳の場合は、父母も死に、貧窮の中、兄弟離散のやむなきに至った生家の再興という大望を抱き、そのために自ら夜となく昼となく身を粉にして働き、寸暇を惜しんで読書を重ねて行ったのです。それは、自立した精神のなせる業であり、強制的な「児童労働」と一緒にすべきではないでしょう。尊徳は、「百姓に学問は不要といわれていた時代に、学問は人生の道を開き、自立と経済の役に立つと信じ（石川佐智子著「世界に誇る日本の道徳力」から）」、その事を人々に実践して見せたのです。

尊徳を「農聖人」と讃えた内村鑑三は、その著「代表的日本人（内村鑑三信仰著作全集6収録）」において、尊徳は自分自身の行為を通して「『自然』は人類の最上の友である事、人類が誠意をもって当たれば、『宇宙』さえ、彼の味方になって、彼を助ける事、鋤一本によって、彼は地上の王ともなり得る事、『徳』は『富』よりも大きな力を持つ事、『仁術』によってのみ、大偉業は遂行され得ることを我々に教えてくれた」と述べると共に、彼こそは「人類の教師」の名に値する人ではあるまいかと述べています。

世に経綸を語る人は数多おりますが、尊徳はその経綸を自ら実行して見せた誠に稀有な人であり、今日においてもその光彩は輝きを失ってはおりません。

（塾頭 吉田洋一）